

黒ギャルR子ちゃんの

ハメパコ日記!



黒ギャルR子ちゃんのハメパコ日記！～第1章 校舎裏での痴態～

著・霜降りカイロ

春の桜が舞い散る季節。入学シーズンでもある四月の初めでは真新しい制服を着込んで緊張の面持ちの生徒が校門をくぐり校舎前の生徒玄関へと足を運ぶ。だが、入学式から一週間ともなれば少なからずにグループが出来上がっているものだ。

男子だけであったり女子だけであったりと色々な集団が談笑しながら歩いている中、注目を集めている一人の女生徒がいた。

女子にしては高めの身長に大胆に着崩した制服。大きく膨らんだ胸ははだけたシャツによって露わになっており、紫色のブラジャーも露出している。制服のシャツの裾を胸元の下でくくり、腹部が陽の光に当たって艶やかに反射する。緑のスカートは膝上10cmというものではなく、大きく、むっちりとした太ももが露出していた。

髪は脱色して明るい色をしている。それとは正反対に肌はこんがり、黒く日焼けていた。そして目鼻立ちはくっきりとしており、端正な顔立ちというのが遠目から見てもわかる。バッチリとメイクされた顔には自信というものが見て取れた。

彼女の名前は本城蘭子。この高校の生徒である。その大人びた雰囲気と高校生離れした色香には男女問わず目が惹きつけられていた。

そんな本城蘭子は道行く生徒の顔ぶれを見ながら、自身の興味を引きそうな、有り体に言えばからかい甲斐のある生徒を探していた。蘭子の近くを過ぎ行く生徒達は、皆彼女の興味を引くような”何か”を持っている

る人ではなく、蘭子つまらないと言わんばかりに大きく息を吐こうとして視線を前へと向け、一人の男子生徒に視線を向けた。

その男子生徒の周りだけ、ぽっかりと空間ができています。集団の中にあっても何処か混じれていないその男子生徒が蘭子は気に入り、ニヤリと口の端を釣り上げて大股に近づいた。

トボトボと、歩く男子生徒は後ろから接近してくる蘭子には気づいていない。だからだろうか、彼女に肩を叩かれて二重の意味で驚いてしまうのも無理はなかった。

「！？ え、あの……誰、でしょうか？」

「ウチ？ 別に誰でもいいじゃん。君があんまりにつまんなそうにしてたからさあ、からかってやろうと声掛けたわけ」

「は、はあ……」

足を止め、蘭子の方に振り返った少年は比較的整った顔立ちをしている。クラスの憧れ、一番のイケメンではないが、三番目の気になる男子といったくらいだろうか。中肉中背で黒髪と見れば見るほど特に特筆すべき部分はない。

だが、それが蘭子の食指を動かさせた。

彼女は馴れ馴れしく男子の方に手を回し、軽く顔を覗き込みながらニヤニヤと笑う。それがなんだかむず痒くて男子はさらに俯いてしまうも、その視線はチラチラとある部分に向けられていた。

「ん～？ どうしたんだよ～、ウチと話そうとか思わないわけ～？ コミュ力低っく、だからボッチなんじゃん！」

「う……！？ そ、そんなこと言われても……」

「ほら！ ちょっとは言い返そうと思わないの？ ほらほら～！」

男子生徒は俯きながら言葉をしどろもどろに返す。だが視線はチラチラと蘭子の胸元に向けられていた。蘭子は男子の視線が己のどこに向けられているか、わかっているが特に指摘することはなく、肩に腕を回しながら自然の動きで胸を押し付けた。

むにゆりと、形を変える柔らかく大きな乳房。しかし柔らかいだけではなく、しっかりとした弾力があり、その弾力と柔らかさが余計に男子生徒の態度を慌てさせた。

蘭子はその初々しい反応に笑みを濃くし、男子生徒の腕をとって歩き出す。

「え？ あ、あのっ……」

「ちょっと授業、サボろうか？」

「え！？ で、でも——！」

「気にしない気にしない！ 授業ぐらいサボっても大丈夫っしょ！ それに——」

「——いい思い、させてやるからさ」

蘭子は男子の耳元に口元を寄せて、吐息を多めに囁く。

その囁きは聞く者の背筋を、湧き上がってくる性の欲求によって震わせる色香が込められていた。高校生程度の人生経験しかない男子では、その囁きに抗う事など出来ず、蘭子に導かれるままその場を移動した。

雑木林が生い茂る校舎裏。整えられているとは言え、校舎の裏という事で影が差し、人気全くないことも相まって授業をサボるにはちょうど良い空間と言えた。そこには申し訳程度の大きさのトイレがある。男女別れているが数人で満員になってしまう大きさだ。

その女子トイレの一室に、蘭子と男子生徒は入っていた。

「えっと……ここ、女子トイレ……ですよ？」

「うん。そう……女の子が用を足す場所で、君みたいな男が入っちゃいけない場所」

「あの……じゃあなんで僕がここに……」

「え～、なんでだと思う？」



男子生徒は挙動不審といっても良い。不安げな顔で蘭子を見ているもしきりに左右を見る。左右を見ても隣の個室との壁しかないのだが、そんなことにも気づけないほどに男子生徒の思考は動転していた。

洋式トイレの便座に座らされており、蘭子に壁ドンされている。それによってむっちりとした肉のついた大きな胸の存在が男子生徒の眼前にはだけたシャツ越しに大胆に晒された黒い肌の胸元は健全な青少年にはあまりに刺激が強く、男子生徒は無意識のうちに喉を鳴らしていた。

食い入るように胸元に釘付けとなっていた男子生徒。蘭子はその態度に気を良くし、もう片方の手で男子生徒の顎に手を添えて、顔を強制的に上げた。いわゆる、顎クイといわれるものだが男女が完全に逆である。

「ねえ、君、名前は？」

「あ……多田将って言います……」

「ふうん、じゃあ将で良いや。将、ウチのどこ見てるわけ？」

「あっ?! す、すみません！」

「ウチはさあ、謝って欲しいんじゃないし〜。どこ見てたのか聞いてるだけだし〜。答えないとさあ……わかるよね？」

本来なら脅しに使われる言葉だが、蘭子は蠱惑的に囁いた。将の顔を真正面から見つめて、舌で唇を舐めて相手の興奮を引き立てた。

「ねえ……ウチのどこ、見てたの？」

「ああ……うう……ゆ、許してください……」

「別にウチ怒ってないからよ〜。ただ、どこ見てたのか教えてくれない？ 将はあ、生唾飲み込んでえ、どこ見て興奮してたわけ？」

「……む、胸です……」

「ふうん♪ ……この、へ・ん・た・い♡」

黒くほっそりとしなやかな指先が、つつと将の顎先を撫でて下へと降り喉元を撫でてさらに下へ。そしてキッチリとボタンが閉じられたシャツへとたどり着いた。

「将。制服邪魔だからさ、脱いじゃおっか？」

「え?! いや、それは——」

「大丈夫だって。痛い事はしないしい……むしろ、気持ちいい事したげるよお。それでもダメえ？」

リップグロスの塗られた桜色の唇がテラテラと光る。その唇を舐め、唾液でさらにテカリを増した唇は半開きとなり将の視線を釘付けにした。

再びゴクリと生唾を飲み込んだ将。彼の心境は一体どのようなものだろうか。グループに混じれず、一人で登校していたら突然知らない女子生徒に声を掛けられ、校舎裏の人気の無いトイレに連れ込まれ靈感的に囁かれる。

その妖しく淫らな囁きは、将の男としての部分を反応させた。体は緊張しているが将の陰茎に血流が集まって固く持ち上がっていく。心臓の音が高鳴り、緊張の中でも鼓動のバクバクとしたうるさい音が彼の体を駆け巡った。

蘭子はそれに目敏く気付いていた。視界の隅で、将の股間の膨らみに気づいた蘭子は妖しく微笑む。そして便座の上に腰掛けている将の膝の上に跨ぐように腰を下ろし、その手を将の首の後ろに回して体を密着させた。

蘭子の肉感的な体が将の体に密着する。それは緊張を呼ぶとともに、それ以上の興奮を呼び起こした。むくむくと固くなっていた将の肉棒だが、蘭子のむっちりとした尻肉の下敷きとなり、布ごしとはいえその柔らかさを感じてしまって完全に勃起してしまう。

「あはは♪ ボッキしてるし〜！ 将ってばわかってるわけ？ ここは女子トイレなんだけど〜？ うちのお尻にチンポ下敷きにされて……勃起させてさあ……マジで変態っしょ？」

固く勃起した陰茎の存在を確かめるように、柔らかな尻肉の感触を味合わせるように、ゆっくりと緩慢な動きで腰を左右に揺さぶる蘭子。たったそれだけで、むっちり肉付きの良い尻肉の虜になった将。蘭子は妖しい笑みを浮かべ、陰茎から体に走る怖気のような快樂に耐える将へと強く密着して体を揺さぶる。

「ねえっ！ なんでチンポ勃起させてんの？ うちみたいなの……エっ口い女にい……あん！ おっぱいとかあ、お尻い……んっ……押し付けられて興奮してんの？ あは！ 凶星って感じい〜？ チンポ、ビクって反応してんじゃん！」

「はあ……はあっ！ そ、そんな事っ……！ 言われても……僕、僕っ！」

荒々しくなる将の鼻息。鼻の穴は大きくなり、顔にはかすかな汗が浮いている。それは彼の高まっていく興奮を視覚的に表す物。その間にもずっと体を揺さぶる蘭子は、将の制服に手を伸ばした。密着して脱がせにくいはずだというのに蘭子は手慣れたものだというのか、鼻歌でも歌いそうな笑顔を浮かべてシャツの第一から第三ボタンまで開けて、微かに汗ばんだ肌を露出させた。

外気に触れてひんやりとした感覚が将の体に走る。だが体の内部の熱は保たれたままで、余計に陰茎に溜まった熱を彼に自覚させた結果になる。蘭子ははだけたシャツから覗く汗ばんだ肌にそっと指を這わせた。指の腹が、男の胸板の上を歩く。ゆっくりと、ゆっくりと、まるでナメクジのように遅いスピードで這っていき、シャツの奥に隠れていた突起にまでたどり着いた。

「ねえ……乳首、なんでおっきくしてんの？」

蘭子の黒くテカる手の先が触れた突起は将の乳首だった。恥ずかしげもなく勃起した乳首に触れた蘭子は指の腹で押し込んだり、人差し指と親指で挟み込んだりして責め立てた。まるでこれは悪い事だと将に教えるかのように。

将は顔を真っ赤にさせて俯くも、視線の先にはシャツに押し込められた黒い双丘が。慌てて視線を上げるも今度はムンムンと色香を漂わせている蘭子の顔とご対面だ。堂々巡りの結果に将自身もさらなる混乱を生みながら、それでも蘭子の柔らかな女体だけは感じていた。

「ねえ……こん、なにい、乳首大きくしちゃってさあ……んっ……男として恥ずかしいとか思わないわけ？　ウチみたいなエっ口～い女に、苛められて……乳首デカくさせるとかマジ変態じゃん！　この変態！　童貞！　包茎野郎！」

矢継ぎ早に繰り出される淫語の数々。それは将を責め立てる物であったが、同時に彼の興奮をさらに引き立てるものでもあった。蘭子に罵倒された事で、息は荒くなり、目は軽く充血している。所在無さげに手が宙を泳ぐも、その手がどうしたいのか一目瞭然である。

そして何より、ズボンの下で固く膨らんでいる陰茎は将の人生の中で最高潮の勃起を見せていた。

「はあ……はあ！　はあっ！」

「あはは！　何？　苛められて興奮してんの？　ウケ～る！　……ウチのお尻にい、将のチ・ン・ポ……ガチガチに勃起してんのわかるよ？　ふふ……もっとお……虐めて欲しい、ウチに？」

まるで愛しい恋人にするかのような耳元での官能的な囁き。将の体はブルリと震えた。耳から入った言葉は彼の脳髓を犯し、そして頭のとっぺんから足の爪先まで快樂を走らせる。そして強く湧き上がってくるのはある欲求だった。

だから、将は己の欲望に従って、口を開く。どう思われても構わない。ただ目の前の極上の女から与えられる快樂欲しさに浅ましく。

「もっとっ！ 苛めてくださいっ！！」

「ぷっ……あはははは！ マジで言っちゃてるし～！ そこはやらせろでしょ！ な・の・に……将は虐めて欲しいんだ～！ マジで変態じゃん！ キツモっ！ このマゾ男！」

激しい剣幕であった。嘲笑いと共に本気の侮蔑が蘭子から発せられる。だが将はそれが良かった。それが血流を熱く加速させて、彼の興奮をさらに引きださせ、陰茎を固く、固く勃起させる。もはや爆発寸前となっている彼の肉棒はビクンビクンと跳ねて、先走りでパンツをベトベトに濡らした。

「うわーイカ臭っ……！ズボン越しにぬめってるしさあ……学校のトイレでおもらしとかヤバすぎ～！ そんなにウチとしたいわけ？」

「は……はいっ！ そ、その……です……」

「何？ 聞こえないし～。まあいっか……」

蘭子はそう言って立ち上がる。密着していた女体が離れたことに将は口惜しさを覚えたが目の前に立つすらりとし、激しく自己主張するむっちりとした胸や尻を見て、強く暗い欲望の炎を瞳に宿らせた。

「パンツ脱げ」

「え？」

「パンツ脱いで下半身マッパになれって言ってんの。そしたらさあ、アタのガチガチになったチンポ扱いたりい、舐めたりしてやるよ」

蘭子は右手の親指と人差し指で輪っかを作り、それを上下に動かす。その動作は健全な青少年にはある意味でお馴染みの動きであり、馴染み深い手の動きが将にはっきりとしたイメージを抱かせた。